

もうひとつの”ラテンアメリカ文学”

川村, 湊 / KAWAMURA, Minato

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Intercultural Communication, Hosei University
Ibunka / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

7

(終了ページ / End Page)

13

(発行年 / Year)

2013-04

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008691>

もうひとつの『ラテンアメリカ文学』

川村 湊

KAWAMURA Minato

西暦二〇〇八年は、ブラジルの日本人移民百年の記念すべき年だったが、私は迂闊なことに、何も考えずに過ごしてしまった。文学関係では、あとで『すばる』が百年記念の特集を行っていたことを知ったが、その時は何とも思わずやり過ごしてしまった。それから二年後に、南米の日系人移民の文学研究の調査を思いついたのだから、間が抜けているというか、タイミングがずれているというべきか、時勢に疎いといわれてもしかたがない。

もちろん、南米の各地に日本人が移民し、そこに「日本語」の文化圏があり、日本語による文学活動が行われていたということに、まったく関心も知識もなかったというわけではない。『コロニア文学』という文芸雑誌がサンパウロで刊行され、そこに掲載された作品の精選集として『コロニア小説選集』という日本語による日系人の作品集が現地で出されているとか（『コロニア随筆選集』もある）、『コロニア万葉集』（一九八二年）のことも、岡松和夫の『異郷の歌』（文藝春秋、一九八五年）を読んでいて知っていた。藤崎康夫、醍醐麻沙夫などの南米に取材した作品もいくつかは読んでいる。

しかし、遠い、地球の裏側のブラジルへ行き、そこで日系人の文学を調べてみようという気にはなかなか出来なかった。時間と費用の問題もあるが、何よりも今ひとつ、自分を動かすモチベーションが足りなかった。リオ・デ・ジャネイロのカーニバルは、一度は見てみたいし、サンバも楽しそうだ。映画『黒いオルフェ』は、リオのカーニバルを舞台とした心に残る名画だったし、ジャン・ポール・ベルモンド

主演の『リオの男』は、素敵な面白さだった。文学でいえば、『老練なる船乗りたち』の旺文社文庫の翻訳以来、『カカオ』や『果てなき大地』などが多数の作品が翻訳されているジョルジュ・アマード（どうしてノーベル文学賞を授賞されなかったのか不可解だ）は、とても好きな作家だ。アマゾン河流域の野生に生きる人々を描いたレヴィ＝ストロースの『悲しき熱帯』のフィールドにも行ってみたい。しかし、それだけでは片道二十四時間の飛行機便の苦痛に耐えてまでの旅に踏み出すには、何か欠けている。だが、とりあえず、行ってみないことには始まらない。私はエコノミー症候群の恐怖と戦いながら、サンパウロはりベルダージ（日本人街＝東洋人街）のホテルにようやく到着した。二〇一〇年八月のことだった。

資料集めから始めた。サンパウロ人文研究所や移民資料館の図書館には、古びたものも新しいものもごちゃまぜで、日系人移民による日本語文献が多くあった。文学同人誌、詩歌集、散文集、創作集、自伝・ノンフィクションなど、文学関係のものも決して少なくない。邦字新聞や邦字誌など、正直、うんざりするといつていいほどたくさんある。購入したり、貰ったり、コピーをしたりしたが、一か月未満の滞在で、間に合うはずがない。何年か続けて通わなければ、資料収集に加えて、それを読み、研究・分析するという作業が終わるとは思えない。資料を集め、ホテルの部屋でそれをばらばらと読み、トランクや鞆に詰める。最初は、ブラジル日系移民の文学史を編むつもりだった。だから、それはあくまでも「文献」あるいは「資料」に対する読み方だった。つまり、その時代にそこで書かれたということが重要であって、文学的な価値や作品の質など度外視していたのである。

だが、『コロナ小説選集』の第一巻から読み始めて、私はそれが傲慢な思い違いであったことに気がつかざるをえなかった。確かに、それは日本の専門的な作家たちの日本語に較べれば、荒削りであり、稚拙であり、作品の作り方も杜撰だったりするのだが、日本語で何か

を表現しようとする情熱や迫力は、決して日本のプロの文学者たちに劣るものではなかった。もちろん、私は商業的に成立した日本の文壇の背後に、「中央」に対する地方「文壇、や、いわゆるアマチュアの文学者たちが犇めいていることを知らないわけではない。ブラジルの日本語文学の世界も、そうした「文壇の中心」から遠く離れた、ローカルで特殊な「文壇、である(あった)ことを、一概に否定するつもりはない。筒井康隆の『大いなる助走』(文藝春秋、一九七九年)が描いたような、文学同人誌内部の笑うべき「小文壇、内の覇権争いのようなものが、『コロニア文学』を中心とするブラジルのローカルな日本語文学の世界になかったとはいえないだろう。日本から有名な作家が来れば、甘んじてその素材提供や取材協力を請け合うこともあっただろう(北杜夫の『輝ける碧き空の下で』は、そうした経緯で書かれた)。しかし、それとは別個に、ブラジル(ラテンアメリカ)で、日本語の文学を作り出そうとする試みが持続されていたことを、私は知ったのである。

そのひとつが、松井太郎の『ブラジル日本人作家松井太郎小説選 うつろ舟』(二〇一〇年)である。もちろん、これは私の「発見、ではない。細川周平・西成彦の両氏が京都の出版社・松籟社から刊行した同書によって読むことができたのだが、ここに収められている長篇小説「うつろ舟」に驚きを感じずにはいられなかった。

大河アマゾンの辺で漁労を営む日本人移民の漁夫がいた。主人公の神西継志(通り名はマリオ)は、白人系の妻アンナに暴行を働こうとしたということで精神病を疑われ、経営していた農場を手放し、妻と離別した。彷徨の途中、赤ん坊を抱えた原住民の女性エバを助け、彼女が病死したあと、彼はマウロと名付けられた男の子とともに暮らし、鯰などの漁をしながら、大アマゾンの自然や人間と「闘い、続けるのである。

一種のピカレスク・ロマン、あるいは冒険小説ともいえる趣きで、

アマゾン流域の荒くれ者、流れ者といっいい主人公の物語が、洪水、疫病、犯罪、復讐といったエピソードを織り込みながら、大河の流れのように展開される。日本語で書かれているのだが、その迫力や作品空間の広がり、¹日本文学離れ、している。そこには、『ラサリーリョ・デ・トルメス』以来のスペイン語文学のピカレスク小説の遺伝子が伝えられているようにも思う。それは、ブラジルに伝わって、民衆詩歌や民衆絵本の世界となり、松井太郎は、そうした伝統的詩型（コールデル版＝紐つり本）を使って日本語による「ジュアゼイロの聖者」という作品を書いている（『ブラジル日本人作家松井太郎小説選・続遠い声』松籟社）

やや古風な文体で、「おれ」という一人称で語られる松井太郎の『うつる舟』のような小説は、日本文学だろうか、それとも、作品世界となっているアマゾンの風土を描いていることから、ブラジル文学と呼ぶべきだろうか。クレオール文学、メスティゾ（混血）文学といった言葉も思い浮かぶが、ぴったりとしない。²もうひとつのラテンアメリカ文学、としての「日本語文学」と呼ぶしかないかと、ようやく思い至ったのである（まだ、その定義に³安住、しているわけではない）。

ブラジルに「準二世」（子供の頃に家族とともにやってきた日系人）の移民として、一九三六年に渡泊し、数々の苦難を体験しながら現地に生活基盤を築き、隠居後に日本語による創作活動に入ったという松井太郎は、現在（二〇一二年）は九〇歳を超えて（一九一七年、神戸生まれ）文学活動に邁進している。ラテンアメリカ世界ではもっとも日系人が多いブラジルにおいても、「日本語文学」の専門作家として立つのは容易ではない（どころか、不可能だ）。自分で少部数の私家版の作品集を作り、時には『コロニア文学』や、その後継誌『ブラジル日系文学』に作品を発表するという形態が、現在のブラジル「日本語文学」のあり方であるようだ。松井太郎、そしてやはり日系移民の世界を短・中篇小説として描き続け、私家版作品集を発刊し続けてい

る伊那宏などの日系人作家らは、そうした方法で、ブラジルの大地・大河から、日本語による文学作品を発信しているのである。

アルゼンチンのブエノスアイレスでは、一九八九年から一九九五年にかけて、文学同人誌『巴茶媽媽』（一号～十号）が発刊されていたことを知った。パチャママと読み、これはインカ族の言葉で、神話・伝説として伝わる大地母神（母なる大地）の名前だ。そこに、増山朗の「グワラニーの森の物語」という長篇小説が九回にわたって連載されていた。グワラニーの森というのは、イグアスの瀧と同様に、アルゼンチンの大自然を代表する原生林で、そこから生物も、人間も、文化も、神話も、すべてが生まれてきた根源としての「森」なのである。

アルゼンチン開拓の歴史を縦軸として、そこに日本人移民の歴史が横軸として織り込まれている。作者の増山朗（一九一九年、札幌生まれ）は、一九三九年に外務省による「農業実習移民」としてやってきた初期の日系アルゼンチン移民の一人で、さまざまな仕事に従事し、アンデスの山越えからラプラタ河の遡上など、アルゼンチンのほとんど全土を旅している。壮大な旅行者、冒険者といえる。

晩年にはブエノスアイレスに定着し、やはり六〇歳を超える頃から、日本語による創作活動に入った。アルゼンチンに戦後渡ってきた宮本俊樹、関口伸治などの親子ほど年の違う若い人たちといっしょに『巴茶媽媽』を創刊し、そこに前記の「グワラニーの森の物語」を連載すると同時に、日系人の古老にインタビューをするなどの原稿も書き、有力な同人として活躍したのだが、私が二〇一一年夏、ブエノスアイレスを訪れた数年前にすでに亡くなっていた。ライフワークともいえる「グワラニーの森の物語」は、残念ながら「前編」を終え、「中編」に入ったところで、永遠の未完となった。

「一移民の書いた移民小説」というのが、この長篇の副題であって、実在した日本人移民の事績や、作者の増山朗自身も時折作中に姿を現

し、日系移民だけではなく、白人によるアルゼンチン移民の開拓史とキリスト教発展史、さらに増山の出身地である北海道人による移民・開拓の歴史など、どんなものでも、坩堝に溶けこませる全体小説という器を使い、アルゼンチンという世界と時代の変遷とを総合的に描き尽くそうとしたのである（守屋貴嗣「アルゼンチン日本語文学論——『巴茶媽媽』について——」『異文化13号』〈法政大学国際文化学部〉参照）。

松井太郎といい、増山朗といい、還暦を過ぎてから文芸創作に打ち込み、高齢に至っても、まだその活動を続けていた（いる）というエネルギーは、どこから来たものだろうか。一言でいえば、ラテン・アメリカの大地の文学の豊饒性に帰するとしかいいようがない。ブラジル語（ポルトガル語）作家のアマードや、ブラジル近代文学の“父”、とっていいマシャード・アシス、ノーベル文学賞を受賞したコンロビアのガルシア・マルケス、ペルーのバルガス・リョサ、そして詩と短篇小説によって現代文学の巨匠となったアルゼンチンのホルヘ・ルイス・ボルヘス。

これらの作家、作品は、まさにラテンアメリカの大地母神である“パチャママ”が生み出した果実であって、そこに松井太郎や増山朗の仕事を、そっと置くことも、また可能なのではないだろうか。ポルトガル語、スペイン語、日本語、そして北米日系三世の英語作家カレン・テイ・ヤマシタ（『熱帯雨林の彼方へ』〈風間賢二訳、一九九四年、白水社〉、『ブラジル丸』〈未訳〉などの日系移民をテーマとした小説を書いている）の英語のように、“ラテンアメリカ文学”は、多彩で豊饒な“言の葉”の繁れる世界なのではないか。

「もうひとつのラテンアメリカ文学」とは、スペイン語のみで書かれる文学の謂いではなくて、その中にポルトガル語はもちろん、英語、日本語、韓国語、中国語などの多言語による、移民や越境者たちによ

る言語空間を基にして展開されている文学空間なのではないだろうか。

晩年のボルヘスは、俳句や短歌などの日本の短詩型文学に関心を持っていたという。これは彼の晩年の伴侶となった日系人マリア・コダマの影響もあるかもしれないが、短く、一瞬の世界の断面を切り取る俳句の表現に、冗長さを嫌い、短篇小説の象徴性に自分の文学的本質を見ていたボルヘスが、日本の短詩型という伝統的詩歌に注目し、スペイン語による「ハイク」の可能性を示していたことはまことに興味深い。日系移民たちがラテンアメリカに持ち込んだ、日本語による俳句や短歌の実践的創作は、日本語人口が減少するにつれ、その最盛期をとうに過ぎつつあるが、そのかわりにスペイン語やポルトガル語による「ハイク」が試みられているのである。

日本文学、ブラジル文学、韓国文学というように、国別、民族別に「文学」を輪切りにするような考え方は、もはや棄てなければならぬだろう。日本語文学、スペイン語文学、さらにラテンアメリカ文学、アジア文学という広領域の文学世界を設計することによって、私たちは本当の「世界文学」の領域に接近することができるようになるのである。

(この文章は、岩波書店発行『図書』2012年9月号に掲載された「もうひとつの『ラテンアメリカ文学。』」を基に、加筆・訂正したものを発表原稿としたものです)